

# 福生市総合教育会議会議録

平成29年度第1回総合教育会議

1	開催年月日	平成29年4月14日（金）
2	開始時刻	午後3時00分
3	終了時刻	午後5時10分
4	場 所	市役所第二棟4階 第1、2委員会室
5	出席者	市長 加藤 育男 教育長 川越 孝洋 委員 渡辺 浩行 委員 加藤 孝子 委員 坂本 和良 委員 野口 哲也 委員 新藤 美知子 福生第二小学校校長 安藤 臣一 福生第二中学校校長 小出 宏 福生第一小学校教諭 樋 惇 紀 福生第二中学校指導教諭 寺 沢 陽 子 福生第五小学校主幹教諭 拝 原 奈穂 実 福生第一中学校主任教諭 古 川 裕 平 企画財政部長 橋 本 満 彦 総務部長 野 島 憲 一 教育部長 久 保 淳 参事兼教育指導課長 井 尻 郁 夫 教育総務課長 中 島 雅 人 教育支援課長 野 崎 昌 利 学校給食課長 村 野 和 彦 生涯学習推進課長 岡 部 健 一 スポーツ推進課長 内 藤 毅 誠 公民館長 佐 藤 克 年 図書館長 森 田 雅 枝 特別支援教育担当主幹 千 葉 かおり 英語教育推進担当主幹 林 宣 之 指導主事 森 保 亮

指 導 主 事 鈴 木 輝

- 6 欠 席 者 な し
- 7 事 務 局 教育部 教育総務課 教育総務係
- 8 傍 聴 人 15人
- 9 議 事 (1) ふっさっ子未来会議報告に基づく諸計画について  
(2) 意見交換  
    ア 英語教育の一層の推進に向けて  
    イ 学力向上に向けた授業改善について  
(3) その他

本会議の結果は、別紙記載のとおりである。

市 長 加 藤 育 男

午後3時00分 開会

教育総務課長　それでは、定刻となりましたので、これより平成29年度第1回福生市総合教育会議を開催いたします。次第に従いまして、加藤市長から御挨拶をお願いいたします。

市長　改めまして、平成29年度の第1回総合教育会議に大勢の皆様にお集まりをいただきまして、まことにありがとうございます。教育委員の皆様方もありがとうございます。傍聴の方も大変多くなりまして、今回で総合教育会議は5回目を数えるのですけれども、部屋もちょっと大きくなったなど、それだけ関心が高い会議だと思っています。年度替わりのときには恒例なのですけれども、理事者、私ども三役とそれぞれ担当の方たちとの意見交換会が行われておりまして、教育委員会と午前中に意見交換をさせていただきました。そのときにも大変うれしい報告をいただきまして、不登校の児童・生徒の出現率が相当低くなってきて、それから学力も大変上がってきた。また、本日は私のたつての希望で教育長にもお願いしたのですけれども、校長先生を初め現場で実際に児童・生徒を指導していただいている先生方にもお集まりいただき意見交換をしたい、この会議の中でぜひやらせていただきたいということをお願いしましたところ、快く引き受けていただいたこと、重ねて感謝を申し上げます。

また、ICTを使った学力向上策とか、それからALTを使った英語教育の充実、特にALTも東京都の御協力もあって、小中学校あわせて全校に5名、優秀な先生方も来ていただいているということで、現場の中に溶け込んでいるということは、私どもも非常にうれしく思っているところでございます。何度も言うのですけれども、教育立市ということをやらせていただいております。教育立市から教育先進市まで行こうではないかと、それぐらいこの何年かのさま変わり、子どもたちを取り巻く好環境は、本当に現場の先生方の御努力のおかげだと思っていますし、教育委員の方の的確なアドバイス等のおかげだと思っていますので、ぜひこれからも一層よろしく願い申し上げます。

そして、今年度は、防災食育センター、新たに中学校給食も含めて、生野菜等も含めた、またアレルギー対応もできるような学校給食センターが稼働します。なかなかすぐ運用になじんでいくかどうかというのは現場の先生方も大変だと思いますけれども、ぜひ御協力のほどよろしく願い申し上げます。

そして、グローバルヴィレッジも派遣事業のかわりに行おうと思ってい

るのですけれども、今のところ応募が、小学生が15名で、中学生が13名ということで、ちょっとときどきしているところでございますので、非常にいい事業だと思っていますので、ぜひ先生方の協力もいただきながら、子どもたちの背中を後押ししていただければという思いでございます。

とにかくふっさっ子の持っている能力を最大限発揮できるような環境をつくるため、市長部局としましても教育委員会当局と連携を密にして一生懸命頑張っていくつもりでございますので、何とぞよろしく願いいたします。また、今回の平成29年の第1回の総合教育会議、ぜひよろしく願い申し上げます。

ありがとうございました。

教育総務課長  
教 育 長

次に、川越教育長から御挨拶をお願いいたします。

大変恐縮に存じます。私から一言御挨拶を申し上げます。

この総合教育会議、国の法改正によりまして、ともに福生市においては新たな教育委員会制度といたしまして、もう今年度で3年目として迎えるところでございます。本市においては、年度早々にこうして開催されますことを大変意義深く感じているところでございます。市長、教育委員各位に感謝を申し上げる次第でございます。そして、本日は、各学校において日ごろ児童・生徒に質の高い指導をしていただいております福生市の先生方を代表して、校長先生、教員の方々に御参加をいただき、子どもたちに一番近い先生方のお声をお聞きするという機会が設けられています。皆様、年度のスタートの大変多忙な時期に貴重なお時間をいただきましてまことにありがとうございます。

本年度、私ども事務局は市長から示されております教育大綱、そして教育振興基本計画〔修正後期〕と実施計画に沿って学校と課題認識を共有し、福生の子ども一人一人を真に大切にされた教育の展開、そして誇りと自信を育む学校教育、さらには生涯学習のさらなる充実を目指し、地域、社会総がかりの教育の実現、市民の皆様の生きがいを組織一丸となって前に進めてまいりたいと存じます。本会の趣旨に沿って子どもたち一人一人の可能性をさらに伸ばすことができるよう充実した意見交換を行っていただき、総合教育会議としてさらに意義深いものとしていただきますようお願い申し上げます。事務局に対しまして、より一層の御指導と御支援をお願い申し上げます。

どうぞよろしく願いいたします。

教育総務課長

それでは、これより議題に入らせていただきますので、加藤市長の議事

進行によりお願いいたします。

市長 議長を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

現在、福生市では7つのまちづくりの目標を定め、子育て支援等コンパクトシティーのよさを生かしたさまざまな施策に取り組んでまいりました。その中でも教育に関する内容を1番目に掲げ、教育環境の向上と学習環境の充実を掲げております。教育委員会でもふっさっ子未来会議報告書「すべてはふっさっ子の未来のために」で示されました諸計画に基づき、ICT推進計画、英語教育の推進等、多面的、多角的に施策を展開していくことは教育長から随時報告を受け、承知をしているところでございます。

本日は、これらの施策は、学校現場ではどのように実践されているのか、また、学校の先生方に率直なところをお伺いいたし、一層の推進を図っていくため現場の先生方にお集まりいただいております。まずは、自己紹介をお願いします。

福生第一小学校教諭 福生第一小学校の教員の樋と申します。東京都の英語教育推進リーダーとして福生一小だけではなく、ほかの学校にも巡回指導しながら英語教育の推進を行っている、そのような仕事を今しております。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

市長 よろしくよろしくお願いいたします。

福生第二中学校指導教諭 福生第二中学校英語科の寺沢です。よろしくお願いいたします。

市長 よろしくよろしくお願いいたします。

福生第二小学校校長 福生第二小学校校長の安藤と申します。5年間、福生第七小学校で副校長を勤めまして、今年度で校長として2年目になりました。よろしくお願いいたします。

市長 よろしくよろしくお願いいたします。

福生第二中学校校長 福生第二中学校校長の小出です。

福生第三中学校で5年間、二中では今年で2年目になります。どうぞよろしくお願いいたします。

市長 よろしくよろしくお願いいたします。

福生第五小学校主幹教諭 福生第五小学校で主幹教諭を務めさせていただいております。拝原奈穂実と申します。五小は4年目になります。現在3年生の担任をさせていただいております。本年度はタブレットを活用させていただくということでも楽しみにしています。

市長 文科省での御受賞おめでとうございます。

すばらしい実績が認められてよかったです。

福生第五小学校主幹教諭 いえ、ありがとうございます。

福生第一中学校主任教諭 福生第一中学校で国語科、それから主任教諭をさせていただいています古川裕平と申します。前任校は福生第二中学校で3年間、今年から第一中学校に異動して、福生市では2校目の中学校です。よろしく願いいたします。

市長 よろしく願いいたします。どうもありがとうございます。

それでは、次第に従い、「ふっさっ子未来会議報告に基づく諸計画について」に入りたいと思います。今日は、先生方に福生市の学校教育について普段思っていること、現場ならではの意見を私や教育委員に率直にお話をしていただきたいと考えております。

まずは、諸計画の概要について、おさらいの意味も込めまして事務局から説明を願います。

参事兼教育指導課長 それでは、私からふっさっ子未来会議報告に基づく諸計画について説明をさせていただきます。

ご案内のとおり、福生市教育委員会では平成25年7月に基礎学力の定着、不登校、健全育成、その他の諸課題の改善に関すること、家庭、地域及び学校における子どもの教育に係る関係機関との連携に関する内容を内容とするふっさっ子未来会議を設置し、学校及び関係機関が協議を進め、6つの未来提言をまとめました。翌平成26年からそれぞれ作業部会を設置し、この6つの未来提言の具体化のための計画を策定しました。

お手元の若竹色の資料をご覧ください。左一列には26、27、28、これは作成年度を示してございます。隣には計画名が掲載されております。平成26年度はふっさっ子スタンダードや福生市立学校不登校対策、特別支援教育アクション20など5つの計画、27年度は英語教育推進計画など3つの計画、そして28年度は体力向上策など3つの計画がそれに該当いたします。昨年度も引き続き作業部会である委員会を継続して実施し、委員会の担当校長及び教員を中心に各校で取組を推進してきているところでございます。例えばふっさっ子スタンダードでは学校で身につけるべき習慣をまとめた学び方スタンダード、家庭で身につけるべき習慣、家庭生活10カ条を統一基準とし、小中で連携して取り組む。不登校対策では、不登校状態になっている児童・生徒への指導、支援を記録する不登校カルテなどを活用した取組を各学校において行っております。

昨年度、平成28年度は福生市の先生がつくったオリンピック・パラリンピック読み物資料集や、ふるさと福生への愛着と誇りを培う学校を作成し、

今年度これらを活用した取組を推進してまいります。

以上、ここ3カ年、6つの未来提言の具体化を目指し、計画に沿って着実に実行しているところでございます。

私からは、以上でございます。

市長 ありがとうございます。今の説明を踏まえまして御意見がございましたら承りますけれども。

教育長、何か補完するものありますか。

教育長 いいえ、特にございません。

市長 わかりました。

ありがとうございます。それでは、今説明がありました諸計画は、ふっさっ子のよりよい未来のために全て重要でございますが、特に今日は児童・生徒に自信と誇りを持たせる施策を中心に進めていきたいと思っております。そこで、英語教育の推進と学力向上に向けた授業改善、この2点を中心に意見交換をさせていただきます。

まずは、英語教育について。英語教育を推進して3年目、市のこれまでの施策について意見をお聞かせいただきたいと思っております。

まず、樋教諭からお願い申し上げます。

福生第一小学校教諭 私からは、小学校での英語教育の実態についてまずお話をさせていただきます。

自分が各学校を巡回していて一番に思うのは、児童もそうなのですが、先生方の意識が変わったことはかなり大きいかなと思っております。やはり去年まではどうしても担任の先生は英語の授業中は授業に関わろうとしなかったり、どうしてもちょっと自信がなくてALTに任せっきりだったりということはあったのですが、今ではほとんどの先生方がT1、つまりメインのティーチャーとして授業を進めている。これはかなり大きな一歩かなというふうに自分は感じています。また、昨年度から始まった英検福生モデルのもと小学校では約132名の児童が英検を受験しました。公費で受験をさせていただきました。また、市内の全高学年の児童を対象としたアンケートでも、本当に9割近い児童が、英語が楽しいと答えております。また、授業の様子を見ても、児童がとても楽しみながら英語を勉強している。そんなことから、児童が喜びだったり、楽しみだったりを見つけながら英語学習に取り組んでいる、まさに小学校で英語教育をやっていくための目的というのが達成されているなど自分は感じています。

また、昨年度からタブレット端末が全校に配布されるようになりまして、

やはり小学校の英語教育では小学生ではまだ文字が読めなかったり、文字を見て何かを識別するというのはまだ十分にできないのですけれども、そんな中でタブレット端末から聞こえる歌だったり、チャントだったり、そういう視覚だけではなく、聴覚にも訴えるような教材というのが入ってきたのはかなり大きかったなと自分は感じています。

以上です。

市長 ありがとうございます。先生方の意識が変わったというふうに言っていた部分というのは私どももびっくりするのですけれども、新聞などで見ますと、やっぱり先生方が英語を教えられるのは、しっかりとできる部分というのは数%と、私どもが考えてもそうだと思うのですけれども、主要教科だとなかなか難しい状況があると思うのです。今、一生懸命頑張っていて、そういう方たちを増やそうとしていますけれども。

福生第一小学校教諭 また、昨年度からALTの勤務体制が変わりまして、16時45分まで私たちの教員と同じような時間まで勤務するようになったので、例えば放課後の時間、ちょっとした時間にALTの先生と担任の先生方が一緒に英語を学ぶような機会というのも割とつくることができたので、そういうこともあって、担任の先生も抵抗感というのは少なくなってきたのかなと感じています。

市長 わかりました。ありがとうございます。

今、樋教諭には小学校という形でお話をさせていただいたわけです。今度は、中学校という部分で寺沢指導教諭、お願いします。

福生第二中学校指導教諭 中学校は、福生市の英語教育推進計画に基づいて進めていますけれども、その中から何点か、樋教諭の話とちよつかぶるところがありますけれども、お話しさせていただきます。

まず初めに、英検の公費での受験についてですけれども、全員が受験する機会を与えられたということで、資格試験に興味のなかった生徒も前向きに取り組んだ生徒はいい結果につながったということがまず1つあります。それから、学習に前向きな生徒は、英検は年に3回の受験があるので、1回目の6月の受験で中3修了程度の3級というのは大体取り終わってしまうのです。ですが、2学期に受験資格を与えられたということで、今までは3級で終わっていた生徒も、その上の級をチャレンジするということがあって、それが非常に大きな成功体験としていろんなことに、受験勉強にも拍車がかかったということが、非常に大きな効果があったのではないかなというふうに思っています。

あと、保護者に何名か電話でアンケートをとったのですけれども、大多数が肯定的な意見だったのですが、全員受験できるということは、非常に公平性があるという声がありました。それから、英語教育に力を入れてきた市というような実感が保護者の方にもあったようで、御褒美のようでうれしいというような意見もありました。また、英検の試験内容を踏まえたコミュニケーションを重視したような授業というのをお願いしたいというような意見もありました。

ALTの常駐配置についてなのですけれども、先ほどもありましたように、放課後5時まで校舎内にALTがいるということ。打ち合わせの時間も以前よりも確保できて大変ありがたいということ、非常に優秀なALTが来ているので、教科指導だけではなくて、いろんなところで助かっているということ。それから、これはちょっと意外に思われるかもしれないのですけれども、最大の利点なのですけれども、やはりALTと話す機会が増えるということは、私たち英語科の教員にとって非常に大きなありがたい機会なのです。やっぱり英語科の教員も日々スキルアップをしていかなければいけないのですが、ALTと話すためにやっぱり自分もレベルアップしていこうという気持ちになりますので。

市長 すごくネイティブな英語ですね。

福生第二中学校指導教諭 はい。非常に有効かなというふうに思っております。

市長 よろしいですか。

福生第二中学校指導教諭 はい。

市長 ありがとうございます。先ほど樋教諭から132名の英検の受験ということは、これは小学校だけでしたか。

福生第一小学校教諭 小学校では希望する6年生です。

市長 132名ですか。

福生第一小学校教諭 132名です。

市長 ありがとうございます。午前中、林主幹から報告をいただいているのですけれども、国の中学校3年生の英検3級以上の所持率は18%だったか。

英語教育推進担当主幹 18%です。

市長 福生は38%ぐらいと、もうそこまで非常に大きな数字をいただいているということで、本当にすばらしく今やる気が出てきているということで、ありがたいと思っています。

さて、ここまでで今小学校と中学校の英語の部分で現場の先生方からお話をいただきましたけれども、教育委員からどうぞ何か御質問がございま

したら。

渡辺委員 ありがとうございます。先ほど、放課後にALTのネイティブな先生に触れることができると、教員が非常に助かるという話をいただきましたが、英語クラブみたいなクラブ活動として生徒たちに指導することは可能なのですか。

市長 どうぞ。

福生第一小学校教諭 可能だと思います。実際に本校ではクラブ活動は、児童からの意見を尊重していきまして、もし子どもが英語クラブをつくりたいということであれば、新設することは可能だと思います。やっぱりふだんの授業以外のところで子どもたちもALTと触れ合える機会があるというのは大事だと思いますので、もしそういう声があれば前向きに検討していきたいと思います。

市長 ありがとうございます。

渡辺委員 中学校はどうですか。

市長 どうぞ。

福生第二中学校指導教諭 部活動の発足は、校長先生にもお伺いしないと、私の一存だけでは何とも言えないのですが、ただ英語サークル的なものは可能かもしれません。学校の表示の英語化、環境整備の面でもALTの方と、あとは実際に二中でもそうですけれども、生徒に手伝ってもらっているいろいろ頑張ってもらったということがあるので、そういったところからできるかなとは思いますが。

市長 今もそうなのだけれども、そばに基地があるということで、英語圏の子どもさん方とそれだけ交流ができて、覚えてたの英語がどんどんできたら楽しくなるのではないかなと思っています。今でも交流があるのだけれども、そういう回数を増やせば、もっともっと子どもたちのやる気も増すのではないかと、そんな勝手なことを大人は思っています。

ほかに、どうぞ。いかがですか。

坂本委員 小学校、中学校両方にお聞きしたいのですが、常駐することによって先生たちもいつでも空いていれば、ALTの方との打ち合わせ等もできるという利点の話がありましたけれども、子どもたちは休み時間、昼休み、中休みも、そういうような時間帯に気軽に話し合っているというような実態はあるのでしょうか。

市長 どうぞ。

福生第一小学校教諭 福生一小では主に給食の時間、ALTが教室に行って給食を食べるということをしています。特に福生一小にはひまわり学級という特別支援学級

があるのですけれども、どうしても時間割の関係でなかなかALTの英語の授業ができない中で、やっぱりいかにその特別支援学級の子どもたちもALTとかかわる時間を持つかというところで、主に給食の時間を活用しています。

坂本委員 中学生はいかがですか。

福生第二中学校指導教諭 中学校は部活動の時間によく部活動に参加してくださっているので、部活動を一緒にやるわけではないのですけれども、その時間を通して触れ合いがあるかなと思います。部活動の試合も見に行ったりしています。

坂本委員 イマージョン教育というのは英語でもって通常の授業をやるということですが、英語の時間に英語で言うのは普通だと思うのですけれども、それ以外の取組をやっている学校の話というのは聞いたことがありますか。

福生第一小学校教諭 まだ、自分の福生第一小学校では開始できていないのですけれども、CLILとしていって、ほかの教科を英語で学習するという取組をやっている他区市の小学校の授業を幾つか見たことがあります。

坂本委員 体育で体を動かしたりするとき、英語ではこういうふうに言うのですよと、ALTの方に教わるとか、そういうのもまたおもしろいかなと思うので、だんだん広がっていければと思います。

市長 今の話だと校長先生がやっぱり入ってこないとなかなか難しいのかなと思いますけれども、わかりました。ありがとうございました。

ほかに。よろしいですか。

新藤委員 本当にこのような形で会議が開かれるというのは、まさに今昔の感といえますか、福生が教育の力を本当につけてきて、子どもたちをどう育てていくかということに踏み込んで、順調に歩いているということの象徴だなと今、感じながらお聞きをしたいと思います。

2つですが、1つは英語の力をつけていくときに、やはりもう常に言われていますが、日本語との問題とか日本文化との問題というのが語られると思うのです。たまたま前、生徒が、非常に英語が堪能になっていったときに、雪吊りをジャパニーズクリスマスツリーと、外国の方に伝えていくということがありました。でもその子は本当にそういうふうに、雪吊りというものを日本のクリスマスツリーだと思っていました。また、そういった英語を話せるということが、逆に、非常識であるようなものを表明してしまうようなことがありました。教科の横断的なカリキュラムといいますが、行事のことを日常化した1時間の授業があるとか、何かそういったカリキュラムが可能なのかということが1点です。

それから、2点目にはこの前小学校の卒業式に参加いたしましたときに、壇上で一人一人頑張る決意表明があったのですが、そのときに「僕は英語が苦手です。だから、中学校に行ったら英語を頑張る」と言った男の子がいたのです。苦手ということが嫌いだということとイコールではもちろんないと思うのですが、全体的に非常にプラスの面がものすごく出ているけれども、まさに評価と指導という意味では一人一人を今後どういうふうに評価して、具体的にどう指導していく、一人一人をどういうふうに上げていき、どう目標に向かわせていくのかというあたりが、やはり今年あたりから学校自身に問われていくことかなと思っていますが、そのあたりの方向性みたいなものについて2点お伺いしたいと思います。

市長 お願いします。

福生第一小学校教諭 教科横断型というところで、小学校では特に英語の時間というのは余り多くなくて、その分ほかの教科の時間数が多い中で、やはり教科横断型の英語の学習というのはかなり重要なと思っています。特に小学校に関しては、まずよく担任の先生から言われるのですけれども、まず日本語だろうというところで、やはり母語が定着していないところで第二言語が入ってくるということはやっぱり言語学的にも厳しい。その中で英語をどんどん詰め込んでしまうことは、やはり英語嫌いであったり、ネガティブな印象を子どもたちが持つてしまうと思いますので、やはり母語の言語レベルに合った英語を主にしていく。また、その教科横断型に関しても、やはり英語を言葉だけで理解しても、よくわからないと子どもたちは思うと思うのですけれども、ああ、こういうことか、これは前の社会科でやったことではないかとか、そのようなところで、頭の中で英語を使いながらマッチングというのですか、そういうことをしていくことによって英語の定着は進むのかなと思っていますので、本校の年間指導計画の中でも今年度からやはり算数との連携であったりとか、それと今度足し算を英語でやってみようという取組をするのですが、そのような教科横断型のことはどんどん取り入れていきたいと思っています。

もう一つ、一人一人のあり方というところで、やはりどうしても英語が教科になるということで評価をしなければいけない。けれども、そこで取り残されてしまう子どもを救わなければいけないというところで、とても今福生市だけではなくて、日本全国の英語の先生たちは困っているところだと思います。この間パフォーマンステストといいまして、子どもたちが一人一人、5年生であればスピーチ、6年生であればインタビューをし

て、それを先生たちが評価するということをやって、どんどん評価が入ってくる中で確におっしゃるように一人一人の上げ方というものをもう少し意識しながら、でも評価もつけなければいけない、そのバランスをいかにとっていくのかというのが課題だと思っています。

以上です。

市長 ありがとうございます。

新藤委員 はい。

市長 確かに新藤委員がおっしゃったように、何か今昔感があるなというのは私も常に思っていますので、昔大変厳しいときに新藤委員が頑張ってやっていただいたこともあるので、本当にありがたいと思っています。

今小学校と中学校の先生方から英語教育のお話をいただいて意見交換もさせていただきました。ここでまとめも含めまして、小出校長にちょっとお願いしたいと思うのですが、小出校長は現在福生第二中学校の経営に携わっていらっしゃいますが、それまで経営されていた福生第三中学校の平成28年度の児童・生徒の学力向上を図るための調査で、調査科目によっては東京都の平均を随分超えているという結果も出ておりますし、そうした経過も含めた、英語教育も含めた発言をお願いしたいと思います。

よろしく願いいたします。

福生第二中学校校長 よろしく願いいたします。まず、三中の部分はちょっと後回しにさせていただきます。英語教育推進に関することをもう少し話させていただきます。

私は今年で福生にお世話になって7年目になりますけれども、未来会議が25年度、26年度とあり、その後英語教育推進に関しては27年度から英語教育推進委員会というのを立ち上げまして、林統括もいらっしゃりスタートしたわけです。各小・中学校の代表の教員、今ここにいる樋先生とか寺沢先生もそうですけれども、それから担当校長、林統括もいる中で推進委員会が設置されました。正直プログレス5を示されたときにはできるのかなと思いました。林統括には当時かなり失礼なことを申し上げました。その後、PLAN FOR 2020ということで、福生市英語教育推進計画がプログレス5をもとにさらにバージョンアップして示されているというわけですが、実際にこれを林統括抜きで各中学校、小学校の代表の教員と担当校長だけでやれということになったら、今の英語教育の進展はなかったのではないかなと思っています。やはり英語教育推進課長職として、英語の高度の専門性がある林統括のような方がリーダーシップをとっ

てくださって、私から見るとできるのかなとか、無理ですよとかと弱音を吐くような校長をぐいぐい引っ張っていってもらって、というようなところがあって初めて、私よりも、むしろ先生方のほうがやる気満々、やってみようという気にもなったような気がするのです。

ですから、そういった特に小学校の先生方、英語の専門家ではない小学校の先生方がすごく一生懸命に2年間やってくれたなと思っています。そんな中で、今私が感じていることは、実はちょっと恥ずかしい話でもあるのですけれども、中学校の英語科の教員の中でも意識の差というのはあるのです。ですから、そこをどう埋めていくのかということが、自分の学校もそうですけれども、管理職としての課題なのかなと思っています。

それから、タブレット端末なのですけれども、今教員が1人1台、英語科だけですけれども、教員が1人1台使えるようにしていただいています。ICTの部分で自分たちのつくった教材を学校に関係なく即座に共有できるのです。例えば二中の寺沢がつくった教材を、もうその日のうちに三中の英語科の教員が見ることができる。お互いにそういう情報交換がすごくできているのです。

ちょっと話が広がってしまうのですけれども、ICT推進計画の中で我々校長会としてお願いしている内容で、もう福生の小・中学校でも福生の先生方がそういう情報共有を即座にできるようなシステムをつくってほしいというふうをお願いしているのです。というのが、今我々の研究会で福教研、福生市教育研究会というのがありますけれども、小・中の教員がみんなそれぞれの部会ごとに集まって研究活動をやっているのですけれども、その部会の中でも例えば社会科であれば社会科の教員同士で情報共有する。それがお互いの切磋琢磨にもつながるし、それから授業力を上げていくことにつながるのではないかと思います。ですので、それを今回タブレット端末が支給されて、目の当たりに見まして、タブレット端末でなければいけないということではないのですけれども、そういったいわゆる市内の小・中学校の教員、情報インフラの充実は、今後もICT推進計画の中でやっていっていただけると、さらに教員研修に深まりがでるのではないかと思います。

それから、もう一点。今度は英語から離れまして、先ほどの学力向上という部分なのですけれども、三中時代、管理職としてこだわっていたことというのは、例えば本来だと学校ごとに毎年テーマを決めて、教員研修を計画するわけですけれども、大概のパターンとしては、どんなテーマであ

っても何人かの教員が授業を公開し、そのために一生懸命準備して、それをみんなが見るといって進んでいくのですけれども、そういうふうの一部の教員が授業を公開し、指導案というプランを立て、それをただ見るといってではだめだと。全員が自分のプラン、指導案と呼びますけれども、指導案を立てて自分もやってみるといってやってみるといってやっぱり教員、先生たちの全体のレベルアップにつながるのではないかと考えています。だから、どんな形でもいいから必ずプランを1つ作り、実際みんなに公開して授業をやってくださいねというようなことはこだわっていました。

それから、OJTというか、オン・ザ・ジョブ・トレーニングでいまひとつうまくいっていないとか、主幹、主任教諭が教諭等に対して指導、助言するというようなシステムがなかなかつくりづらくて、その辺も何とか充実させていきたいなと思っていました。それで、同時に教科の専門性を高める上ではオン・ザ・ジョブだけではなくて、オフ・ザ・ジョブということで、学校外に出ていくことはやっぱり常に呼びかけていって、小・中学校の教員の場合、都の教職員研修センターと一緒にやってまいりまして、それに1つは行こうということ働きかけていたことがあります。そういった例題がないとか、私は行きませんみたいなことがどうしてもあるのですけれども、いや、もう一つチャレンジしようというような働きかけはこだわっていたなと思っています。

あとは、小中の連携です。やっぱり小学校の土台の上に中学校があるということで、そこで小学校の先生方とコミュニケーションを少しずつつくっていく。それで教員同士、管理職はどうでもいいのですけれども、教員同士がしっかりと話し合いができる、あるいは知り合うということの中で、何か新しく一貫性のある教育活動が生まれてくると、その辺のことがもしかすると課題になっていたかなとは思っています。

済みません、長くなりまして。

市長　　いいえ。ありがとうございました。今3人の先生方に英語教育について現場の報告をいただいたわけでございますけれども、最後に小出校長先生からは学力も含めてのまとめを、お話していただきました。これに関しまして、御意見がございましたら遠慮なくどうぞ。

新藤委員　今小出校長先生がお話になったような方向性というのは本当によく納得できます。その中で、今後進んでいく研修の中で一番懸念されるのはやはりマニュアル化だと私は考えています。マニュアル化の中で硬直した指導であるとか、あるいは教員の個性を發揮できない学校体制といったものに

つながっていく怖さというのは常に感じております。その中で、今回の英語教育については、林統括がいてこそそのリーダーシップによる実現であったということはみんなが考えているところですが、そのような形で教育委員会の教育指導課がどのようにチェックしながら改善し、その課題に向き合い続けて学校の方向性を持っていくのか、そして教員研修につきましても、そのあたりが教育指導課絡みの話になっていくのかなと考えておまして、そのあたりの構想をもし持っていられれば、お聞きしたいなと思います。

市長　　そうですね、では、林統括指導主事、どうぞお話を承ります。  
英語教育推進担当主幹　　何と申しますか、身に余るお言葉をいただきましてありがとうございます。本当に最初私自身も確信があったわけではないのですが、先生方とお話する中で、ああ、この先生方だったら、きっと大丈夫だろうなどだんだん考えるようになりました。今では私にとって、英語教育推進委員会というのは、私自身の一つの宝物であって、英語教育を推進する上での非常にいい仲間だと感じています。特に小学校においては、英語そのものがもう新しいことなので、まずは先生方に自分たちが今までやってきたその教科と同じように英語もきちんとやらなければいけないのだということを理解していただくということ、そのためにはその前提条件となる知識であるとか、それから教えるための技術であるとか、そういったものを身につけてもらう、あるいは身につけてもらうために何をしたらいいかをまずわかってもらう、そういうところがまずスタートなのかなと考えています。ですから、今新藤委員から御指摘いただきました今後の研修の方向性というものも基本的にはやはり英語がほかの全科と並ぶような、そういうような位置に来るにはどうしたらいいのかということが、まず小学校においては基本になってくるのかなと考えているところです。

　　以上です。

市長　　ありがとうございました。明確なお答えをさせていただきました。今は、林指導主事には英語に特化してお話をさせていただきましたけれども、今新藤委員が、先生の個性を大切に云々という話が出ましたので、井尻教育部参事からお話をいただけますか。

参事兼教育指導課長　　新しい学習指導要領でも注目されている、言葉としては消えてしまいましたけれども、アクティブラーニングというものです。今は一言で言えばどういうことかという、深い学びです。子どもたちにどんな力をつけたいかということを明確にする、あるいは学んだ後の育った姿はどうである

かということイメージした場合、そこに行き着くにはいろいろな過程があると思うのです。深い学びというのは学習過程の中に隠されているものですから、そういうところについてやはり授業研究を繰り返し、繰り返しやっていくしかないのではないかなと思います。もちろん若い先生方が福生市には多いので、基本的な一つの型みたいなものが当然あってしかりですし、型がなければその先もないという考え方もあります。しかし、新藤委員がおっしゃるとおり、マニュアル化してこのパターンをやっていけばいいなというのは形骸化してしまい、力がつきませんので、これからは学習過程をしっかりと見て、管理職の先生もそうですし、行政の我々もしっかり指導していかなければいけないなと思っています。

以上です。

市長 ありがとうございます。新藤委員、よろしいですか。

新藤委員 はい。ありがとうございます。

市長 ほかにございますか。よろしいですか。

坂本委員 今3人の先生方から本市の英語教育に関する取組について非常にいいお話をたくさん伺ったのですけれども、小出先生の話にありましたように、やっぱり先生方の中にはこういった政策に対する受けとめ方も差があって当然だと思いますし、全員が同じことをできるわけではないと思うのです。ですから、先生方に今進めている施策というものを理解していただいて、取組を深めていただくためにはさらにどのようなことが市の教育委員会として必要だと思うのか。さらに、これまでああだ、こうだと、先ほどのプロセス5を見たときにこんな無理だろうというようなのはあったと思うのですけれども、やってみても、やっぱりここはちょっと苦しいな、ここはちょっと方向変換してほしいなというようなものがあつたらば、ぜひお聞かせいただきたいのですけれども、いいことだけ言っていたのでは先に進みませんので、そうではないところも率直な意見を今日はお聞きしたいと思います。お願いします。

市長 どうですか。

福生第二中学校校長 確かに中学校ですので英語科は専科なのですけれども、その先生自身の英語力というよりは、やっぱり英語科というチームとしての目標設定みたいなことが、まずそういうことになれていないといえますか、中学校というのは少人数習熟度別、いわゆる東京都のガイドラインに沿ったような形、少人数指導を始めてもう10年くらいになるのですけれども、そうすると当然何人かの教員が協力し合ってプランを共有しなければならないのですけ

れども、意外と勝手気ままにやっていた実態のある学校もあるのです。少人数はちゃんとやっているのだけれども、その内容はそれぞれの教員と個性に任せてしまっているところなのですけれども、そういった実態のある学校もあるのですけれども、それをいかに福生二中であれば福生二中の英語科として、こういう手法でこういう力をつけさせていこうといった、そういう英語科同士のコミュニケーションというか、そういったものができていないかなど。できている学校も多々あるのですけれども、なかなかそういうきちとした議論が教科内でできていないというのは実際あります。そこを越えさせないといけない、越えなければいけないのかなと思っているのです。

あと、先ほどのマニュアル化みたいなのところでいくと、これもやっぱり学校職員の文化というか雰囲気、雰囲気づくりのところになってくると思うのですけれども、例年踏襲はやめよう、一つでも新しいアイデアを出していこうというような呼びかけや、それからそのために、でも新しければいいわけではなくて、さらにこうすればこういうふういきっとよくなるだろうという、根拠が必要で、そのためにはやっぱりリサーチが必要だと思うのです。それは、ある意味データであったりとか、あるいは先生たちの感性で感じ取ったものであったりでもいいのですけれども、そういった常に子どもたちに資質、能力を高めるにはどうしたらいいかなというところで、常日々考える教員集団、そういう癖というか、そういったものはつくりたいというのが、私が今感じている課題です。ですから、これはもう教育委員会と学校の関係とかという形ではなくて、やっぱりそういうこれからの教員というのは、一旦つくり上げたマニュアルを常にそのままやっていたら、ずっと定年までやれるということはまずなくて、社会そのものはすごく早いペースで変化しているわけですから、子どもたちも変化しているわけですから、昔の子どもたちの実態に基づいて授業やっても何の意味もないわけですから、そういったところを職員がみんな自覚する。それに基づいて、しっかり認識して力をつけさせていく方法は何かということをもみんなで考えていくという形をつくりたいなと思います。

市長 ありがとうございます。坂本先生、よろしいですか。

坂本委員 はい。折々で聞きます。

市長 ありがとうございます。

時間もちょっと迫ってきましたのですけれども、本当に今大変貴重な経験をさせていただいているなと思っているのです。また、新たな教育委員

会制度になって、教育委員の方と色々な形で意見交換をさせていただいて、その中で出てきたのが小6の児童とか中3の全生徒の英語検定公費の受験、あるいは小・中学校全校へのALTの派遣や配置、あるいはふっさっ子グローバルヴィレッジの開始など、新たに予算を伴う部分がこういう会議と同時で進行していくわけです。今こうやって現場の先生方とお話をさせていただいて、ちょうどいい機会ですから、私に要望みたいなものがあるならば、今お聞きしておこうと思います。なかったらないでいいのですけれども、よろしいですか、今のところ。もし何かありましたら、後で教育長を介してでもお聞きしておきます。結構です。

それでは、本当にありがとうございました。

続きまして、学力向上に向けた授業改善についてを議題とさせていただきます。「教育は人なり」と昔からよく言われておりますけれども、授業の成否は教員の資質、能力に負うところが極めて大きいと私も認識しているところでございます。どうやったら授業がうまくいくのか意見を伺いたいと思います。

まず、初めに古川教諭、お願い申し上げます。

福生第一中学校主任教諭

学力向上に関してではなくて、私は2つの視点でお話をしたいと思います。

まず1点目が、教える側の研修体制ということで、やっぱり小出先生と重なる点が多いのですが、特に中学校は教科担任制ですので、どうしても自分の教科の世界に入ってしまう、同じ教科間、例えば国語科ですけれども、国語科内でもなかなか交流ができないというところがあります。特に自分の授業をしているときに他の先生方の授業は見られないので、そういう意味で研修というのがとても重要だと思っています。私は、学力向上委員会に参加させていただいて、そこには小学校の先生方、中学校の先生方で校種をまたいで、いろんな教科の先生がいらっしやって、福生市の学力向上について話し合うのですが、それ自体が私の研修になっています。本当に新しい視点をいろいろいただいて、そういう機会がとても大事だと思います。

それから、二中でも校内研修を行っていますが、2年間にわたり評価について行ったのですが、教科をまたいだ話題だったので、やはり教科間での議論がかなりできて、なかなか形にするのは難しいですけれども、話し合うこと自体がすごく研修として意味があったかなと思っています。

もう一つは、学区での交流会をやっていますが、これも多忙の中でなか

なか難しいのですが、やはり小中でやることですごく気付かされることが多いです。今私中1の国語を、今日も授業をしてきたのですけれども、小学校の先生の話を生徒にすると、生徒はとても生き生きと話をします。担任の先生はどんな先生だったのと聞くと、こんな先生だったよと話します。例えば、今はもう青梅に異動してしまったという話ですとか、国語はどんな授業だったのと聞くと、こんなことをやって、こんな楽しいことをやりますとって生徒は話をしてくれます。でも、私は見ていないので、実際様子はなかなかわからないのです。その小学校でどんなことをやっているのか。でも、子どもたちの中は、小中はつながっているのです。小学校の記憶の続きで中学にいる。同じ日にいろいろな教科を指導しているのですけれども、中学校の教員は自分の教科だけ教えているという、その断続があって、子どもたちは実際つながっているという部分を実は意識していかないと授業力の改善にはつながらないのかなと思います。そういう意味で研修や小中の交流会授業を見るのがとても重要だと思っています。

それと、要望をいいですか。

市長 いきなりですか。

福生第一中学校主任教諭 そんなに高価なものではないのですが、ぜひ中学校に小学校の教科書を買っていただけないでしょうか。これは、学校予算でできるのかもしれませんが、結構使用するのです。例えば小4、5、6年生の教科書を教科でそろえるとか、逆に小学校に中学校の教科書を置いていただいて、先生たちが自然に見ることができるようにすると、小中のつながりを保つという意味になるのかなと思います。

すみません、長くなりましたが、もう一点いいでしょうか。

市長 どうぞ。

福生第一中学校主任教諭 授業内容についてなのですが、福生市の課題は、生徒が大変だったときにはやっぱり基礎、基本の定着、とにかく基礎のみの定着を重点に指導してきたのですが、今はだいぶ改善されてきて、今度は活用をどうするかという話になるのですが、結局活用と基礎という、二項対立ではないのですが、いまだに基礎ができていないのに応用力、思考力、判断、表現力という、その応用力がまだ早いでしょうと言う教員がおります。無理だ、もっと基礎をちゃんと身に付けなとという、どちらかの話になってしまうのです。でも、実際はスポーツの練習もそうですけれども、基本練習だけやっていたら、意欲もなくなるし、それは実践で使える力にはなりません。やはりその過程、過程で練習試合に行つて、実際に試し

てみて、その基礎練習の大切さとか、こう頑張ろうという意欲を高めたりという往還というか、有機的なつながりというのがあると思うのです。でも、部活ではそういうことをやっているのだけれども、どうしても先生方の中には、まだ基礎がしっかりとできていないのに、そんな言語活動とか言っている場合ではないでしょうということに行ってしまうがちです。実際、東京都教員研究生として東京都に1年間行かれていた福生二中の川村先生が、去年1年間、数学科で言語活動を取り入れた研究をされたのですけれども、効果が実際にあったのは発展クラスの子よりも基礎クラスの子のほうが実は成績が上がったという結果を出しました。それは、やはり意欲にも大きな影響があったのではないかなと思います。そういった意味で今までの福生のやり方だけではなくて、やっぱり活用をどんどん取り入れていくということが大事で、そのためにはどういう力を身につけさせるかという、その力の意識というのをこの学力向上策にもあるのですけれども、つけさせたい力の明確化をした上で有効な言語活動や、そういう活動を取り入れるということは大事なのではないかなと思っています。

市長 ありがとうございます。再三申し上げますけれども、午前中の教育委員会からも井尻参事の報告というか、今年重点事項の中でも応用的な感覚を身につけさせたいという話がありましたので、先生の今の話と合致するような感じでございます。教科書に関してはやります。やらせますのでよろしく願います。何か小中一貫教育がまた再燃しそうな話になっていましたね。やっぱり連携が大事だと思っていますので、わかりました。

続きまして、それではお待たせしました拝原教諭、タブレット活用に関しても放課後学習の改善等いろいろあると思うので、よろしく願いいたします。

福生第五小学校主幹教諭 それでは、よろしく願います。私からはタブレットをおとし活用させていただきまして、算数科で主に朝学習と家庭学習において活用させていただいたわけなのですけれども、そのときの効果と、それから私が課題として考えているところなどをお話しさせていただきたいと思っています。

まず、とにかく子どもたちの学力を向上させていくときに大切なのは、子どもたちのやってみたいとか勉強したいという思いをまず持たせることが大事で、そういった際に子どもたちはもうゲームの世界に生きています

から、ああいったものを手にすること自体がもう本当に早く使ってみたいと思えるものだったわけです。いろいろやってみてよかった点は、幾つもあったわけですが、その中で特に多かったのは子どもたちに今お話しした学びたいという意欲を持たせることができたことと、それからとにかく個に応じた指導です。私たちが丸つけをするのに大変長い時間、子どもたちを待たせてしまう。一番つまずいているお子さんのそばに行って支援をしてあげたいところを丸つけに追われてそれができない現状があります。そういったときにタブレットでつまずいているお子さんにはそれに応じた学習課題が提示されたり、逆に一方でどんどん問題数をこなせるお子さんにはそういった形で課題が次々と提示されたりしまして、どの子にとっても大変有意義な、有効な時間、学習活動になったのではないかなと思います。

また、家庭学習についてです。学力向上を考えていくときに学校だけでなく、家庭における保護者の方の御協力ですとか、そのような時間というのはとても大切な大きな役割を果たすところだと思うのですが、やはりお仕事をされているおうちが多い中で、教員はご家庭で勉強させてください、音読を見てあげてくださいとか、宿題を見てあげてくださいと言いますが、本校で実施した保護者アンケートの回答では、とてもそんな時間はとれません、もっと学校で見えていただけないかというような御意見もいただきます。ふだんの紙ベースのプリントですと、子どもたちにとってみれば、次の日まで自分が書いた答えが合っているかどうか分からない。また、家で課題に取り組んでいる際には全く分からないこともあります。そして、そのまま次の日を迎える。そこでもう勉強に対するやる気も失せていくわけです。それが、あのようなタブレットがあることで、子どもたちが学校にいるときと同じようにヒントがもらえたり、トロフィーだとかシールだとか、何かしらの御褒美があったりする。学校にいるときと同じような形で先生がそばにいるような感じがする。そういったタブレット学習が家庭でできるというのは本当に子どもたちの学力を学ぶ意欲を高めるためにとても有効なものだったと思います。

ただ、一方で持たせていけば学力が向上するかというと、そうではなかったなと思います。やっぱり子どもたちがつまずいているときに、こんなふうにするといいよという助言ができたり、頑張っているときに頑張ったねと褒めてあげられる、そういった最適なタイミングでの励ましですとか、支援というのが子どもたちに、またやってみようという意欲を持たせるこ

とになると思いますので、ただ与えっぱなしでは学力向上は望めないのだなということも、わかりました。

また、アドバイスが出てくるのだからほっておいて大丈夫だろうと思うとそうではなくて、私の授業を見ていただきましたけれども、やはりまだまだ具体物を操作、半具体物を操作しながらでないとう理解できないお子さんもたくさんいますので、そういったタブレットとアナログの面と、デジタルとアナログの面を上手に使い分けながら活用するようにしていく必要があるなということも感じました。

とにかく子どもたちに学びたいという思いを持たせることで、ICTを上手に活用していくことはとても有効なことであるなということには本当に感じています。

ありがとうございます。

市長 はい、わかりました。私も拝原先生の授業を見させていただいております。今お話の中で持たせるだけではだめだということがよくわかりました。ただ、あの授業ができる先生が何人いらっしゃるかなというのをちょっと思うのです。相当難しいテクニックがあるのではないかと思いますけれども、それはちょっと後で聞きましょう。

では、とりあえず安藤校長先生にお話をお伺いしたいと思いますので、よろしくをお願いします。

福生第二小学校校長 二小の安藤と申します。よろしくお願いいたします。学力向上ということで経営する立場として考えてきたことをまとめましたので、ここでお伝えします。

学力向上を考えたときに、1つの視点としては教えられる人と教える人と両方の側面があると思っています。つまり教える人、教師の向上、教えられる人、児童・生徒の向上、その両方を向上させていくことがやっぱり学力の向上になるのだらうと思うのです。私は、小出校長先生と一緒に福生の小学校で7年目を迎えて、七小時代から考えたときに、まず教えられる人、児童・生徒の向上という点で、この6年間の中で学びの構え、準備が整ってきたなと感じます。つまり、学力を向上させるための第一歩が、よし、勉強しようと思う、机に座る、鉛筆を持つ、姿勢をよくする、先生の話の聞こうとするという、この構えがないと、どれだけ一生懸命先生が教えてもなかなか頭に入っていないのです。この落ちついた環境の中で子どもたちがしっかり学ぼうとする、福生市はその構えを定着させてきたなと僕は感じました。僕が平成23年に福生第七小学校に赴任して校内

の子どもを視察していたときに、体育館の裏の戸の窓ガラスがガムテープで全部目張りされてありました。これは、なぜですかと聞いたら、6年生が授業中に脱走してここの中に入ってしまふからですよと、そんな時代が実はほんの少し前にあったということを知りました。今、福生七小は非常に落ちついた環境で一生懸命子どもたちは勉強しています。

そういうふうに、どれだけ一生懸命学校で勉強しようと思っても、学級自体が落ちつかない、学級が崩壊してしまっている。友達が立ち歩いて奇声を発する。そういう状況ではなかなかその構えができないというふうに思います。では、そこを僕はなぜ福生はそこを乗り越えられたのかということを考えてとき、3つあるなと考えました。

1つは、授業指導補助員さんのお力です。小学校は1年生から3年生までの国語、算数のクラス掛ける授業日数の80%の授業指導補助員さんの予算をつけていただいています。この方たちが主に低学年のクラスに入りながら授業支援をすることで非常に落ちついた環境をつくってくれました。かつて小1プロブレムという課題がありました。一番学級崩壊が多かったのが1年生でした。子どもたちの落ちつかない状況の中で、一旦崩れるともう年度末まで引きずってしまうケースが半分以上という報告が東京都教育庁の調査で平成21年に出されました。同じような状況が福生市でもあって、低学年のうちに学級が崩れると、その後の2年、3年で建て直そうとしていてもやっぱり先生がかかわるとまた崩れていってしまうような状況がありました。そういう意味で小1プロブレムも改革するのにこの指導補助員さんが本当にありがたかったなと思います。

もう一つが、新藤先生がやってくださった教育相談室です。これまでは、どんな子が入学してくるか全くわからなくて、入学してきたらもう大変な状況になっている子がもう次から次へといいて、その大変さを目の当たりにしてどうしよう、どうしよう、保護者とどうやって相談しようというふうな形で進めていたので、非常に対応が後手後手になって教師も疲弊していました。新藤先生が教育相談室に入られて、子どもたちの実態をきちんと把握されて、幼保から小につながるところできちんと情報をいただいて、どういう子が来るのか、どういう支援が必要なのかということを教えていただいたことで、学校側は構えができました。その子たちに対する支援をすることができた。そういう中で小1プロブレムの問題がすごく大きく改善したなど、本当にこれもありがたかったなと思います。

3点目が、ふっさっ子未来会議の成果物である、ふっさっ子学習スタン

ダードです。学ぶときの姿勢をきちんと足をつけて、手をつけてという、前を見て話を聞きましょうという形を、それまではどうしても必要だったら各学校でつくっていたのですけれども、それを福生市として統一したものを出していただいたことで、統一した指導ができるようになってきました。

この3つが小1プログラムを改善して、乗り越えて学級が落ちついてきて、そして、よし、勉強しようという落ちついた環境が生まれてきたということが、学びの構えとしてできてきたと。これがすごく大きいなと感じています。

もう一つの、教える人の向上ですけれども、教える人の向上については、やっぱり教育委員会の方が非常に常識的でやる気のある先生を採用していただいているなということだと思います。昔は先生に背広を着せるのにも大変だったのです。教育委員会が来るので、今日だけは背広を着てよ、スーツでも着てよという、何で着なければいけないのですかみたいなことを言う人が平気でいたのですけれども、今はそんなことを言う人は誰もいない。非常に常識的で真面目で、芯のある教員が多くなりました。これも、本当に教育委員会の方のおかげだと思っておりますし、そして主幹が全ての学校にそろって、ピラミッド型の指導体制ができて、計画的にその方を育てるという形もできてきたということ。やっぱり学力向上策として、福生市として教え方のスタンダードをつくらうということで、昨年度向上委員会でやりましたけれども、そうしたことがこれからどんどんつながっていくと考えています。

学力調査という物差しで学力を見ると、福生第二小学校も平成28年度は平均点を下回ってしまいました。平成27年度は全国を超えていました。福生七小のときもやっぱり超えたり、下がったり、超えたり、下がったりというところですね。やはりきちんと構えができてきて、教員が真面目に一生懸命やるぞという熱意があって、そこにチームワークが生まれている、これが今の状況になっています。ですので、これから期待していただいているのかなと感じております。課題も幾つかありますけれども、少し長くなりますので以上で終わります。

市長 ありがとうございます。学びの構えができてきたというふうな話をいただきました。今、安藤校長先生の話聞いていて、私も市長に就任して丸9年になるのですけれども、特に議員のときからというか、PTAもやっていましたし、議員のときから教育部門の質問を結構していました。で

すから、特に教育委員の皆さんもそのころの一番きつところ、身につまされる思いで、私もこの変遷をずっと目の当たりにした人間の一人です。本当に時代の移り変わりというのはこんなにすごいのだなと。どれだけのパワーがあつてここまで来たかなというのはつくづく私も感謝して、本当にありがたいと皆さん方に思っています。

さて、ここまででどうぞ、教育委員の皆さん方。

野口委員 前回の総合教育会議でもICTのことについて、質問させてもらったのですけれども、タブレット端末を使うことというよりかは、学習データが蓄積されていくということで、その子どもの弱点だったり、さっき拝原先生がおっしゃっていた、その子に応じたという、その子にとって苦手な部分はどこなのかとか、学年の特徴とか、小学校の特徴等、そのデータが集まっていくということがすごく子どもの学力向上において有効なのではないかなという思いから、前回の総合教育会議のときに、ぜひICTの活用をというお話をしました。拝原先生は現場で実際にやる中で、いろんな子どもたちのデータがたまっていくということで、子どもの学力向上に、現場の感覚として本当に有意義に活用できるのか。それは、例えば拝原先生みたいなベテランな方ではなくても新人の先生でもそのデータを見ながら、この子はこういう部分が苦手なのかなとか、授業構成に生かせるのかなとか、今までの知識と経験でいろんな先生が培ってやってきた授業というのも大事かもしれないけれども、でもそれがなくてもそのデータを共有することで若い先生でも授業に有効活用ができるということであれば、すばらしいと思います。現場感覚としてどうなのか教えていただけたらと思います。

市長 では、拝原先生、お願いします。

福生第五小学校主幹教諭 私がタブレットを活用させていただいたときに、ちょうど新採の先生と一緒に組ませていただきました。当時、やるKeyという学習システムを活用していく中で、子どもの理解度が色別に出てくるわけです。80%の理解度を示すお子さんは水色になっていたり、逆のお子さんはピンクになっていたりというのが一目で見てわかるような形になりますので、それを見ながら、私たちは朝学習や次の授業で課題はここに持ってこようとか、そういったことは彼女もやっていましたし、子どもたち自身もそれを見ながら自分の課題に向き合えるというか、自分が苦手としていることはここだからということで、次の課題を自分で選んで取り組んでいけるようなこともできましたので、そういったことを踏まえると、新採の教員であつて

も活用ができたと思います。

市長 いいですか。

野口委員 そういう感覚が今あるというふうにおっしゃっていただいたので、先ほど小出校長先生もおっしゃっていたのですけれども、いろんなデータが上がってくるので、そういうのは本当に有効活用をするために、職員ネットワークみたいなお話をされていましたが、それはこのICTのことに限らず、いろんな先生たちが抱えている研修の課題とか悩みも含めてですけれども、そういったものが福生市の先生同士で共有できるインフラが整ったりするとすばらしいなと思いました。勉強のデータだけではなくて、例えば研修のお話も先ほど出ていたと思うのですけれども、どなたか、ベテランの先生の授業の様子がそのネットワークで例えば動画でいつでも見られるとか、そのような活用方法もできるし、いろんなところでいろんな先生がすばらしい取組をされているのが市内の先生たちの中で共有されていくと、もっともっと有効活用できていいのかな、と感じました。

以上です。ありがとうございます。

市長 ありがとうございます。

ほかに。先ほど教育相談室の話も出ていましたので、新藤委員、もう少しお話をいただければ。

新藤委員 本当にありがとうございます。教育相談室で取り組みましたのは、まさに古川先生がおっしゃいましたように、教員、学校、行政は段階、段階で途切れていくけれども、子どもはともかくその道を一貫して進んでいくときに、つまずきがあって、中学校の荒れた状態というものを実感していたわけです。そういう中で、相談室が専門性を持って子どもを見取り、その専門性を持った情報と支援を学校につなげていくということは、相談室の使命として、全心理士たちも自分の役割として、福生市でも特にこのことは大きな役割として、相談室で認識していたところです。ですので、安藤校長先生がそこを評価し、学校現場で生きているというふうに言ってくださったことにつきましては、本当にありがとうございます。これは、また心理士に返してしっかりと学校体制をまたさらに向上させていくということにしたいと思います。

市長 ありがとうございます。

新藤委員 もう一つ。また別のことを言います。

市長 はい。

新藤委員 タブレットというのは本当に私も全くわからないままの質問なのですが、そよかぜ教室の子どもたちにも導入させていただいたときに、その意欲の喚起と公平性というのですか、どの家庭環境でもある程度のことをできるということでは本当に素晴らしいという実感を持っております。今後、学校現場が中学も含めて、主体的、対話的な深い学びというのを追い求めていくときに、非常に先生方が忙しいというのはもう誰もが言っていることだと思うのですが、知識習得について、タブレットに一定の領域をもう任せる。それで、先生方がやっていく授業を深い学びに、時間的にも、あるいはその自分の余力も投入できるみたいな可能性というのはそのタブレット活用で今後あるのでしょうか。

福生第五小学校主幹教諭 さまざまな活用ができると思うのです。タブレットは一斉に共有化が図ることができる、そういったところに利点があると思うのですがけれども、いろいろな先生方が取り組まれているところですが、体育で例えば跳び箱ですとか、マット運動を動画撮影して、その過程をみんなで見合って意見を伝え合うとか、理科の観察の過程を撮影、記録をとって、子どもたち自身が考えたことをみんなで共有化を図っていく。それを画面上に映して見るとか、いろいろな使い方があるかなと思っています。

新藤委員 ありがとうございます。

市長 でも、さっきも私も心配な部分をちょっと言いましたけれども、その活用方法というのは、相当熟知していないとなかなかできない難しさもあるのかなと思っています。ただ、私ごとで恐縮ですが、孫が三小に行っていて、今もう4年生になったのだけれども、3年生になったときにタブレットを持ってきて、じいちゃん知っているか、3年生になったら、これは全部貸してもらえるのだと、ものすごく喜々としてずっとやっていたのを見ていて、こういう新たな使い方、すごくうれしそうにやっているので本当に、私も、これはやっぱり予算づけしなければいけないのかなとそんなこと思いました。

ほかにどうぞ。よろしいですか。

坂本委員 古川先生と拝原先生、それぞれに聞きたいのですが、最初に古川先生が校種教科を超えた意見交換の重要性の話が話題になったのですが、全くそのとおりだと思うのです。それは、ではどうすれば実現すると思いますか。教育委員会ができるとしたらどんなことがあると思いますか。それを最初にお聞きしたいのが1つ。

それから、拝原先生のほうですけれども、機器管理、タブレットでもパソコンでも何でもそうですけれども、子どもたちが取り組むメリットというのは、まず自分の好きな時間に自分の好きな内容を自分の好きなスピードでできるというのがありますよね。もう一つは、わからないことを聞いても、間違えても怒られないという、これがコンピューターを使った学習の中の子どもたちが一番喜んでいるところだと思うのですけれども、もう一つ心配なのは、最初はやっぱり興味があるのでがんがん、がんがんやると思うのです。でも、それが、2年、3年というふうに行ったときも、その意欲というのは継続されるものなのかどうか。まだ、福生の場合は期間がそれほど長くないのですけれども、例えば飽きやすい子というのは、1カ月でも飽きてしまうと思うのですけれども、そういったものについての何か実態があったら教えていただきたいと思います。どちらからでも結構です。お願いします。

市長 どうぞ。

福生第一中学校主任教諭

いろいろなアイデアがあると思うのですが、昨年の3月に多摩教育推進委員会という会で研究発表があって、そこでは教科横断的な資質、能力の向上ということで、横断的なカリキュラムの開発というのがテーマになって井尻先生が担当されていたのですけれども、何か教科を超えて身につけさせる力というのを想定しているといいと思うのです。例えば資料を活用して意見を言う力とか、あと根拠を持って自分の何かを判断する力とかというのは、国語とか数学とかに限らず、どの教科でも使える力だと思うのです。それは、キャリア教育にもつながっていくとは思いますが、そのような1つ、学校で1つでも2つでもいいのですが、何かキーとなる力を想定してチームを組みます。全9教科でチームというちょっと漠然としてしまうので、3教科ずつとかで自分たちの教科ではその力を高めるためにどういうことができるかというのを話し合いながら協力体制をつくります。しかし、教科の力だけになってしまうと単独の教科なので、教科横断的な力を想定して、例えば、自分は音楽の授業でこれをやるから国語ではやりましょうと進めていくのです。そのような視点でチームをつくっていくというのが、一つの解決策の提案、アイデアなのではないかなと私は思っていますが、なかなかその教科の文化がありますので、それを実際にやるのは難しいかなと思うのですけれども、1つそういうのがあると思います。

市長 ありがとうございます。

では、拝原先生。

福生第五小学校主幹教諭

実際、あのときも1週間でもう飽きてしまうみたいなお子さんも実際にありました。その際に、私は、それはもうタブレットに限らず、どの教科でもそうだと思うのですけれども、子どもたちに何のためにこの勉強をするのかというところはいつもいつも子どもたちに伝えて、その学んだ後、どういった甲斐があるのか、学んだ甲斐がある学習をしていきたいと考えていまして、そういったことを子どもたちに伝えたり、実際に先ほどもお話しましたように、理解ができていない問題のところには赤い印がつくわけなのですけれども、それを子どもたちに朝学習の際、提示して、これをきょうこの問題を解いてみんなで青に変えてみようとか、そういった教師の投げかけによって子どもたちが少し意欲を持って続けていたりですとか、お家の方を巻き込んで、それこそ御協力いただいたこともありました。子どもたちがこういうふうには飽きてきているので、おうちの方も、すごいね。よく頑張っているねとか、そういう声かけをぜひしてくださいなんていうことを学級だよりだとかで投げかけたこともありました。

以上です。

市長 よろしいですか。

渡辺委員 1ついいですか。

市長 どうぞ渡辺委員。

渡辺委員 お伺いしたいのですけれども、先ほど古川先生、小学校の4年生から6年生までの教科書が欲しいとおっしゃっていましたが、それというのは、例えば特定の子がそこら辺でつまずいているのではないかということがあるので欲しいというお話だったのですか。それともどういう教え方をしているのか、何を教えているのか、そこを知りたかったから教科書が欲しいとおっしゃったのか、教えていただけますか。

市長 どうぞ。

福生第一中学校主任教諭

例えば数学だと先生おっしゃったように、どこでつまずいているかというのは、例えば分数のところではつまずいているとかはそういうのを使って教え方を工夫できると思うのですが、もう国語はとにかく繰り返すので、どちらかという前にどういうことを教えていたのか。そこから始めようというので使いたいと思うのです。例えば、私、故事成語とかことわざというのを教えたときに、実はもう小学校で結構同じようにやっているのです。だから、そういうのを知らないで、同じことをまた繰り返してしまうというのがあるので、では小学校でここまでやったから

中学ではここやろうねと、でも、まずは小学校ではどんなことやったか思い出してごらんという進み方していくと、子どもの中で学びの連続性というつながりがあります。そのためには最低限教科書にどんなふうにかかれているのか、学習指導要領だけではなかなかわからない部分なので、また、教科書によっても出てくる学年が違ったりするので、そういう意味であったほうがいいかなと思いました。

渡辺委員　そこで、ICTを活用して、カルテみたいなものですね。この子は小学校でここまでできていたとか、中学校に入った子どもが、この子はここでつまづいていたのだなとかというのがICTで読み取れるようになるものなのか、逆に私はそこを聞きたいのです。そういうふうにはできるものなのかどうか。

福生第五小学校主幹教諭　どうですかね。そこは個人情報であつたりだとかして、それを保管していくというの難しいのかなと思いますけれども。

市長　どうぞ。

福生第一中学校主任教諭　よく考えたら、小学校からの申し送りはすごく限られた情報しかなくて、正直学年ごとにどういう成績だったかはわかりません。しかも、通知表の中身も私たちは見ることはできないので、ちょっとした目安の学力、国語の何かのテストの点数ぐらいしかわからないのです。そういう意味では、私はアンケートをしています。小学校のときにどうだったというアンケートをとりますけれども、ICTでそういうものはないです。

市長　実は市長会の中でも結構評判になっていまして、先ほど教育相談室で新藤先生がずっと本当に御尽力していただいた市長部局である子ども家庭部、保育園等の連携。情報をとにかく学校に送るといのは、福生はよくやっているなど言うのです。さっきおっしゃったように、個人情報の部分がございますし、ただやっぱりそれがその子どもたちにとって非常に有益だという私の判断で、そういう形でやっていただいているのですけれども、そう考えると幼保小ですね。それはある意味、幼保小の連携であって、それが小中というの、例えば小中一貫授業をやっているところは、そのところもできているのかどうかというのは、私もまだ調べていないから定かではないのですけれども、そういう部分は教育長、どうなのですか。

教育長　今、国でも義務教育学校は設立できるようには法律改正をして、小中一貫というのによく取組が行われているのですが、先ほどのタブレットに関して小中一貫がどこまで可能なのかということなのですから、これは実は話がちょっと前後しますけれども、タブレットを私たちが導入

しようと思って慶応義塾大学と企業に相談を申し上げたのは、先生方あるいは指導主事がいろいろ学力対策をしている中で、やはり子どもたちが家庭学習の時間が極端に少ないのです。だから、学校でその場ではわかるのだけれども、なかなか定着しない。学習の定着が見られないのは、やはり家庭学習の少なさであろうと。そういったときに、これは慶應の先生と議論したところなのですけれども、やっぱり家庭の環境の差異に関係なく子どもたちが平等に何か学習できる機会を保障したいということを提案申し上げ、ああいうモデルを企業とともにつくってきたということです。

ですから、そもそもタブレットが導入されて、いろんな地区で先進的に、国内で進んでいたのは言語活動とか課題解決学習とか共同学習、話し合い活動みたいところで非常に使われている場面が多かったのですけれども、東京都なり、あるいは国が目にしたのは、これを家庭学習に向けている福生市の取組というのは非常に興味があるというふうなこと、特に不登校の問題を非常に東京都も苦慮していますし、そういった意味でこれを使い、先生方との接点を多く増やしていき、そういう意味で子どもたちとの信頼関係などを、もう少し前に進める部分があるのではないかとということで導入いたして、さまざまに先生方の意見を聞きながら、恐らく企業も変えてきたのだらうと思うのです。それを学び、どの単位でつまづいているかというのは、相当膨大なデータ量になってくるのだらうと思うのです。これからは、やはり一学校とか教育委員会だけではなくて、研究機関も巻き込んで、そのビッグデータ等の分析をしながら具体的な提示ができるような、関係性をつくっていく必要があるのかなと思います。私たちが今、例えばスプリングスクールで行っているテストというのは、あれは小学校の復習テストなのです。そこで指導主事がまとめた結果を私のところに報告しますけれども、ではどの単位に一番つまづいている割合が高いのか。それは、小学校に示さなければ意味がないよねというようなところで、テストをもう少し有効活用していただきたい。ただ、古川先生おっしゃるように、恐らくはあのテストだけ見てもわかりにくい部分、もっと子どもたちの個々の問題というのはあるのだらうと思います。そういった意味では、今後いろんな情報を、やっぱりICTというものを生かさない手はないと思うので、さまざま大学等の連携を持ちながら具体的な分析ができて、学校でも本当に生かせるような資料を提示したいなというところがございます。

それから、幼小の問題は野口委員がいらっしゃいますが、特に、これも

私たちがこのタブレットを研究する中での議論で出てきているのは、子どもの力というのは3歳から10歳までに培われると言われていています。だから、そこでどういう子どもに対する教育的な営みがあったのか、それはすごく大きいとよく言われます。私も、もう市長とずっとそういう話をしているわけなのですが、やっぱり幼保小の連携は、後ほどもちょっとお話ししようと思ったのですが、今後の課題であろうと思います。これから保育園も恐らく幼稚園のプログラムをやっていくようになってくるだろうと思いますので、そういった意味で野口委員、幼保小のほういかがですか。

野口委員 幼稚園の場合は、その子どもの指導要録を必ず小学校に資料を持っていくという決まりがあるので、それは今までどおり行っているのですけれども、ただ実際それがかなり形骸化しているところもあって、一応資料としてはつくるけれども、本当に3月ぎりぎりになってお渡しすることもあり、それよりもその前のときに近隣の小学校の先生に園に聞き取りに来ていただいて、そこでコミュニケーションしてより細かいお話を伝えるというほうがすごく有意義というか、活用されているかなという気はしています。いずれにしても、そういう形でなかなか紙ベースだと伝わりにくいところを、直接のコミュニケーションでお伝えするというのはお時間を割いてきていただいていたりますのですけれども、そういった形は一番効果があるというか、お互い顔を見て、伝えられるというのはいいかなと思っています。

市長 ありがとうございます。  
どうぞ。

新藤委員 相談室のことで確認させていただきます。小学校にお伝えする情報は原則的に保護者の許可をとっております。伝えることがいかに有効であるかということをお理解いただいて、その上で原則はやっております。

それから、もう一つは、相談室にかかってこない親御さんとか、あるいは非常に難しい親御さんもいらっしゃいます。ただ、そのときには、著しく健全育成を害するような情報であるならば、そこに許可が得られなくても関係者が共有していいという条文がございます。その中でやっております。だからこそ専門性なのです。専門性、一般的な話ではなくて、だからこそ専門性ということをお相談室はお願いをして、専門家によって判断して、それを伝えていくというふうになっておりますので問題にはならないかなと認識しております。

市長 ありがとうございます。よろしいですか。今その議題に入って、

(1) から (2) の意見交換まで全部終わったわけですが、非常に有意義な時間を共有させていただいたなと思っています。先生方はどういうふうに思っているか、お一人ずつこういう会議に出てもらっていろんな意見を求められ、どういうふうに感じていただけるか、率直な御意見を、お話をいただきたいと思います。

樋教諭からお願いします。

福生第一小学校教諭

自分は今教員4年目でして、学校のことも、石の上にも3年を過ぎわかってきたところで、今日このような場に呼んでいただいて、正直最初は緊張していました。でも、こういう場が設定されて、やっぱりそれは何のためかという、全部子どものための事を思ってやること、やることは確かに学校の現場の先生は忙しいのですけれども、やっぱり全部は子どものために動いているというのを今ここで改めて皆さんのほかの学校や、いろんな立場の方の話を聞いて、そういうふうに認識をしました。

市長

ありがとうございます。

それでは、寺沢先生お願いします。

福生第二中学校指導教諭

ありがとうございました。私は、福生市は今年で10年目になりまして、こんなに長くいることになるのは10年前は思ってもいなかったのですけれども、英語科の教員ですので、もういつでもどこでも英語を教えることしかできないのですが、この春に卒業生を出しまして、卒業生の感謝の作文というのを一人一人に書かせたのです。それが、卒業生の答辞になったのですが、その感謝の作文に親だとか教員だとか、いろんな周りの先輩だとかということに感謝を書いた生徒たちが多くいる中で、福生市に感謝の気持ちを書いた生徒というのもいました。七夕祭りであったり、楽しいこともたくさんある市で、それと同時に図書館であったり、それから英語教育であったりということに、常に学ばせてくれたということに感謝を書いた生徒がいて、英語を推進してきたということが生徒の実感としてもあるのだなということで、ひとつ私もすごく読んでうれしかった瞬間です。

市長

ありがとうございました。

福生第二中学校指導教諭

頑張ります。

市長

どうもありがとうございます。よろしくお願いします。

福生第二小学校校長

どうもありがとうございました。このような機会をいただくということで非常に緊張しておりましたが、加藤市長と直接こうやってお話ができるというのは本当に他の市であるのかな、ということをおもって、本当に子どもたちのことを考えていただいているな、といいますか子どもと一緒に

に考えてくださるのだなということを感じました。教育委員の皆さんともいい関係になって、本当に一緒になって子どもたち、学校をよくしていこうという一体感が本当にあって、今日は本当にありがたい機会だったなというふうに思いました。

ありがとうございました。

市長  
福生第二中学校校長

ありがとうございました。今日はありがとうございました。個に応じた指導と学習ということが叫ばれて久しいのですけれども、でも、それだけ、では私たち教員が一人一人の子の実態をつかんでいるのかなというようなことを改めて思いました。特別支援に関してもそうですし、単純に学力という点でもそうなのですけれども、やっぱり我々意外と分析していないのではないかと思います。ちょっと長くなってしまうのですけれども、例えば二中が日本語学級にして、1年たって日本語の指導を受けている子たちのモチベーションが上がりましたよという報告は学級担任とかから受けていて、ああ、やっている生徒は出ているなど思っているのですけれども、年度が改まって、では、日本語学級に在籍している子たちの学習成果をどれだけチェックしているのかと思ったら、全然やっていなかったのです。それで、モチベーションが上がっているその根拠になるデータが欲しい。だから、今年日本語学級の教員にお願いしたのは、彼らの定期考査等のいろんな調査も全部一人ずつについてカルテをつくっておいてくださいと。データですね。伸びがどれぐらいあったのか、実際に聞かれたときにちゃんと答えられるようにしておいてと。一方では福生二中の先生たちも福生二中の子どもたちに対する分析もまだまだだなど思っていて、やっぱりそういったしっかりとした課題だとか、分析に基づいて、ではどうしたらいいのかというのを、やっぱりもっとちゃんと考えていかなければいけないなど改めて今お話を聞いていて思いました。

今日はありがとうございました。

市長  
福生第五小学校主幹教諭

ありがとうございました。本当に今日はありがとうございました。私は、大きな市からこちらに異動してまいったのですけれども、福生市は小学校と中学校、先ほど古川先生がおっしゃっていましたが、本当に連携をして子どもたちのためにどういった取組をしていけばいいのかとか、一生懸命考えてるところが本当に魅力的な市だなというふうに今働いていて思います。また、推進計画というものも子どもたちのために一生懸命やっている。そこに私も

一緒に参加させていただいていることを今日また改めて感じる事ができて、さらに頑張っていかななくてはいけないなど、子どもたちがわかるようになりたいとか、できるようにになりたいと思う存在であるということを常に胸にとめて、これからも頑張っていきたいと思います。よろしくお願いします。

市長 よろしくお祈りします。

福生第一中学校主任教諭 私は、ことしから教務主任をさせてもらえて担任を外れてしまったのが初めは本当に悲しくて、子どもたちとは距離があいてしまったかなと思ったのですが、やっぱり一方で学校というのは組織だと思いのですけども、この組織をどうしていくかというのは、実はすごく大事な問題だと。子どもとちょっと間をあけただけですが。今ブラック企業だとさんざん言われて超過勤務の話とかもあるのですが、子どもたちのためなら全然自分は時間を惜しまないという先生はたくさんいらっしゃると思うのですが、一方でやっぱり無駄になってしまっている部分とか、そういう効率化という部分がやっぱりどうしても見えなくなってしまう。子どものためだからということで全てが行われてしまっているところがあるので冷静な目で組織とか、いろいろな業務の効率化というのを一方で行っていくということで、なくすものはなくすということも勇気を持ってしていくことが結果的に子どものためになるのかなというのを感じているので、そういう視点でこれから私も頑張っていきたいなと思っています。

市長 ありがとうございます。もう先生方、本当に今日は改めて感謝申し上げます。ありがとうございます。

先生方、今現場のお声をお聞かせいただいたわけですが、それで教育委員会もちょっと人事でかわっておりますので、組織改正がございました。一言ずつ、きょうの総合教育会議も踏まえて話をもらいたいと思います。

まず最初に、久保教育部長、お願いします。

教育部長 4月から教育部長を拝命いたしました久保でございます。本日、御出席いただきました、先生方本当にありがとうございました。

ここでお話を伺っております、改めて教育という仕事に携わることが大変意義深い仕事であると思った次第でございます。そういった中で、教育部長として所管しております生涯学習ならグローバルヴィレッジであるとか、図書館の調べ学習であるとか、児童対象の公民館事業やスポーツ事業、また部活動への協力や、体力向上への協力、そしてまた子どもたちが

安全に学校に通えるように見守りに力を入れさせていただいたり、また新しい給食センターもいよいよ稼働いたしますが、そういった学校給食を安全に提供することなど、学校現場が安心して学力を向上し、また授業改善を進めていけるよう安心安全な学校環境を守っていかなければいけないという思いを持たせていただきました。ありがとうございました。

市長 では、同じ部長職で井尻参事、お願いします。

参事兼教育指導課長 それでは、一言御挨拶を。

昨年度までは、前列側におりました。こちらへ来て2週間になるのですが、福生の施策を正面から受けとめて、学校現場でそれぞれ先生方が工夫して取り組んでいることが今日改めてよくわかりました。以前行政職も経験しておりますので、そのノウハウを生かしながら、福生においても今度は支える側としてしっかりとやっていかなければいけないと思っています。我々の仕事は、すべてはふっさっ子の未来のためなのですよね。3月に告示された次期学習指導要領改訂の理念は、社会に開かれた教育課程であり、学校での学びを社会とのつながりや社会の中で生かすことが求められています。私の使命は、次期学習指導要領の理解を促すといったところになるのかなと思っていますので、皆様どうぞよろしくをお願いします。

市長 よろしくをお願いします。

千葉主幹、何かあるでしょう。

どうぞ。

特別支援教育担当主幹 私は、福生市に来てちょうど一年が経ちますが、本日は、福生市の推進力の力強さを改めて感じました。その底力は、特に学校の先生方、そして子どもたちが生み出しています。教育委員会として、学校をどのように支えていくか、しっかりと考え、一つ一つ取り組んでまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

市長 よろしくをお願いします。

今日は、現場の先生方に御足労をいただいて、この総合教育会議においていただいたわけですので、どんな要望が来るかと思って総務部長と企画財政部長も同席させていただきました。自己紹介だけしますので、まず総務部長の野島から。

総務部長 総務部長をしております野島でございます。直接今お話を聞いていたのとは関係ありませんけれども、現在、50代の職員が非常に少なくなっておりまして、その事務の引き継ぎということで教育委員会の職員も含めまして、

そのところに現在、課題を持っております。そういった意味で、私も含めて再任用の職員ということで管理職をさせていただいておるのですが、レベルの水準を保ちながら引き継ぎをさせていただきたい。人材育成もしっかりさせていただきたいというふうに考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

市長 決意表明ということですね。

それでは、橋本企画財政部長です。

企画財政部長 企画財政部長の橋本でございます。よろしくお願いいたします。

本日お話を伺いさせていただきました。未来提言に基づき綿密に準備されましたさまざまな計画と、それに基づきまして児童・生徒に対し熱心に指導をされてこられましたALT、また教職員の皆様の御努力、そして当事者である児童・生徒の努力の結果、合格率の問題ですとか、また学力向上に向けての取組の結果として、その他の学力についても向上をしているというようなお話も伺いました。市長の言葉の中にもございましたけれども、教育立市から教育先進市へと現実味を帯びてきていると感じたところでございます。

また、中学校に小学校の教科書をという話で、市長は確かにやりますとお答えをしておりました。確かに聞いておりました。

以上でございます。

市長 はい、それでいいのです。

本当に時間がなくなってきたので、総括で川越教育長、お願いします。

教育長 本当に盛況の会議で、冒頭申し上げましたけれども、本当に意義深い、現場の学校の先生方に実際に入っていて、市長との意見交換、大変私もさまざま勉強させていただきました。ありがとうございました。

いよいよ福生市の学校教育も、これまでは健全育成だとか、さまざまな部分での労力は非常に高かったわけなのですけれども、そういった部分でようやくこういう学力だとか、授業改善等を中心に行っていただく先生方にお集まりいただいて、こういう話ができるということは大変うれしく思っているところでございます。そんな中で、私から、若干、駆け足で話をさせていただければというふうに思っております。

そもそも論から入ってしまうところがあるのですけれども、何回も出ておりますけれども、やはり福生市の課題というのは私がちょうど10年前に着任したときの状況なのですけれども、当時の教育長からこのような課題を言われて、これを専門職として何とかしなさいということでございまし

た。

当時の学校の状況というのは、本当に先ほど新藤委員や安藤校長が具体的におっしゃっていましたが、さまざまにやはり問題といたしますか、もう先生たちも全力ではやってはいるのだけれども、それ以外のところに問題の所在を置くようなところの先生方がちょっとやっぱり多かったかなという気がいたします。行政との距離も非常に感じましたし、このままではやはり子どもたちにいい結果は出ないなということで、基本的に抑えなければいけないことと、魅力的に何か先進的に行えるものと同時並行でやっていく必要があるなということを感じまして、結局当時の教育長、教育委員の方とさまざま御相談申し上げて、やはり人事をやりたいということ、ここで東京都にはかなりお願いを申し上げ、ここにいらっしゃる坂本委員にも随分御苦労いただいた部分でございます。人事と指導ということを徹底的にこの改革の旗印にしてきたという部分でございます。子どもたちに何とかして自信を持たせたい、先生方には子どもたちの可能性を追求していただきたい、そんなところから市長にお願いをいたしまして、ふっさつ子未来会議を開催し、もう手元にあるとおりでございます。

ここでもちゃんとデータを分析して、客観的な数値をもとにきちんと議論しようということで坂本委員にこの会を仕切っていただいて、こういった形で福生の強み、子どもたちの強みもそうですけれども、福生市の強みを見ながら、これを生かせるまちづくりにつなげていけるよう子どもたちを育てていきたいということでこの会議を開いてきたわけです。そして6つの未来提言をしていただいて、それに基づく計画をもう既に、例えば小学校の授業指導補助員だとか、福生市がこれまでかなりの財政を投入していただいた部分も含めて、こういうさまざまな計画が必要であろうということで計画をつくっていった。これがちょうど昨年度までにほぼ完了できているのかなと。おかげさまで、こういったことを推進していくと。これは東京都の学力調査の結果なのですけれども、4年前の数値なのですけれども、24年度と28年度を比較すると、D層、学力が厳しい層の子どもたちの割合が、例えば国語でいうとこのように減っているし、社会でいうとこのように減ってきている。数学も同じように。これは、全教科、特に理科はこれだけ減ってきている。それから、英語においてもかなりの部分で減ってきている。対照的に今度は学力が高い子どもたちも増えてきていると。国語は14から26、社会が14.5から17.7と、英語においては14.2から30というような形で子どもたちは下位層が減少し、上位層が増加しているといっ

たようなデータもあります。

それから、これが公費で行った第1回目の英検の結果でございます。これは、林統括がまとめたものなのですが、私が驚いたのは、準1級だとか1級に挑戦する子がいる。ましてや合格している子までいると、これは大変びっくりしたところでございます。準2級あたりも、これだけの子どもたちが挑戦できるのだなということは、これまでの経験で大変驚いたことでございます。英語の成果ということで、先ほど何度も確認させていただいておりでございます。適応支援室、不登校の子どもたちも6人受験した。それから、2次試験の合格率が何と98.8%、ここにはALT等の取組もかなり影響があったということです。3級以上の所持率の全国平均を大幅に超えているということ等が成果として挙げられ、課題としては教育委員から、不合格だった児童・生徒への意欲をちゃんと面倒みなさいというようなことも御指導いただいたところでございます。

それから、不登校の出現率に至っては、これは一番新しいデータなのですけれども、これは28年度の速報値で、福生市が何と中学校が高いときが6%にもいたわけなのですが、これが3.94まで減ってきているという、全国平均にはまだまだちょっと課題はございますけれども、そういった部分ではかなりの成果が見られるようになってきたというところでございます。私は、この成果がなぜここまで来れたのかなとひとつ思いますと、それはもちろん歴代のさまざまな教育委員を初め、学校やら、校長先生やら、先生方の御努力はもちろんその時々々の努力があつてこそ今があるわけなのですけれども、やはり市長のリーダーシップは大変大きいと思っております。先ほどから何度も出ております教育立市というお言葉や、教育委員会のさまざまな補強をしていただいたり、教育支援課を設置していただいたり、大きな予算がかかる部分もかなり市長のリーダーシップでここまで学校教育にかけていただいているなということを改めて感じた次第でございます。

それから、ここはちょっと大事なところだと思うのですが、これまでの人事と指導行政というものを改革しようということで当初考えていた部分なのですけれども、やはり僕は今先生方にこうやってお集まりいただきましたけれども、やっぱりここまで成果を子どもたちが出せているのは人材に尽きると考えています。校長先生方を初め、それから学校の先生方がやはり子どもたちの学びを支えるという意味での教師力や学校力の向上が見られます。人材の確保が大きく前進をして、非常に質の高い先生方にお集まりいただいて、小中が一体的な前進が見られるというところが大きいので

かなと。これは、10年かかっております。それから、行政職の専門職もかなりのレベルの人たちに集まっていますので、そういった意味では学校との信頼関係というのが今非常にいい循環で築きやすくなっているだろうと思います。

それから、大きいのは指導観の転換、これは2番目の問題とちょっととリンクするのですが、先生方が子どものよさや強みを生かすこと、あるいは問題の背景を見て、対応に非常に笑顔が多くなってきましたよね。先ほど10年前の話をいたしましたけれども、大きくこの辺が変わってきたなど。先生方の指導観の転換で、子どもたちに随分先生方の思いが伝わるようになってきたなど。あるいは、今日のように学力や授業改善に重きを置く人材を活用していく。

それから、2つ目がやはり安藤先生がおっしゃったように、児童・生徒の情緒の安定ということです。教育センターを改革して、専門家がきちんと入って、就学相談等が的確に行われるようになってきているよう、福祉、心理、こういったことの専門的な連携が深化をしているということ、個別の教育ニーズと支援の一体化が図れるようになって保護者との信頼関係が随分構築できている。それは、もう新藤委員と、数年前にずっとお話を申し上げ、新藤委員にも校長として着任していただいたころから、こういうことを課題として挙げ、ようやくここまで実現できてきたというふうな思いでございます。

それから、施策の展開と発信ということでは、やはり先ほどから議論になっておりますように、英語教育やタブレットの導入、それから産官学といった意味で積極的な施策の社会的な認知が非常に高くなって、児童・生徒、保護者、教職員の学びが期待感になってきているかなという部分も、良循環、好循環の一つかなと思っています。

それから、本日手前みそで大変申しわけないのですが、行政職員は、やはり都の予算や国の予算やらふえますと、事務量は膨大になってまいります。組織も出てきますと新たな責任ということも発生いたしまして、その点本当にさまざまな施策の展開に対して予算確保をきちんとし、事務運営をきちんとできていると。そういったところが4番目に私は大きな力となっていると思っております。

最後なのですけれども、行政と現場の距離が非常に遠いという話を10年前の状況からいたしましたけれども、今全く逆で、こうやって先生方と直に話を聞いて、市長と話をしていただけるように非常に改善のベクトルと

いうものが合致するようになってきたということと、今日後ろのほうにも傍聴でたくさんの方々に来ていただいていますけれども、やはり地域社会総がかりで教育を、いい教育、よりより地域によい学校、よい学校のところにはよりよい地域があるのだと。そういった意味でさまざまな人材も含めていい循環になっていると思っております。今後の教育課題については、先ほどから議論されておりますように、さまざま人的な部分も含めて今後検討して、私たちも頑張っていかなければいけない点があるかと思えますので、どうぞレジュメを用意しましたので、また時間があるときに見ていただければ大変ありがたいと思っております。

いずれにしても、今後教育の品質保証といいましょうか、そういった点でまだまだ私ども途切れることなく子どもたちを支援していかなければいけないという思いでございます。また、まだまだとは申しても、成果が出ているという話をしておりますけれども、教育支援という意味ではなかなか行き届かない子どもたちがいたり、伸ばし切れていない子どもたちの能力もまだまだ隠れているということを感じるところでございます。

本当に今日は意義深い議論を校長先生方、先生方ありがとうございました。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

市長 「すべてはふっさつ子未来のために」ということで、川越教育長から総括の発言がございました。

議題がもう一つ。(3)のその他。次回の会議について確認したいと思うのですが、次回の会議は10月に行いたいと思っておりますけれども、異議ございませんか。よろしいですか。

(「異議なし」の声あり)

市長 細かいスケジュールは、また追って事務局からお話をさせていただきますけれども、一応それを決めさせていただきます。

議題でございますけれども、不登校と今話がございまして、随分減ってきているという大変うれしい報告がございましたけれども、不登校と特別支援について取り上げたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

最後になりました。本当に今日は何度も申し上げますけれども、先生方、お忙しいところ、庁舎までお出向きをいただきましてありがとうございました。すばらしい時間を共有させていただいたと思っています。軽々に私ども話させていただきますけれども、教育立国になぞらえて教育立市だと、何とか福生、こんな小さなまちだけれども、人材だけはもう宝で宝庫なのだというふうなことを言ってみたいということが夢としてありました。

着々とそういう形に近づいているのではないかなと、今日はゆっくりと眠れそうな気がしますので、本当にありがたいと思っています。今後とも「すべてはふっさっ子の未来のために」、よろしく願いいたします。

ありがとうございました。

教育総務課長 先生方を初め、皆様、長時間にわたりありがとうございました。これを持ちまして、平成29年度第1回総合教育会議を終了とさせていただきます。お疲れさまでございました。